
そうだ。バトスピで食べよう。

ダ・カーね。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうだ。バトスピで食べよう。

【Nコード】

N6561Y

【作者名】

ダ・カーね。

【あらすじ】

異界の存在発見と同時に、地球へ伝来したバトルスピリッツ。

これによりバトルスピリッツ、プロハイランカーリーグが発足してから30年。

以前から高級ブランドで名を馳せ、今ではバトルフォームファッションやカードスリーブの特許権すら持つ“レイ・ロレンツォ”社。

その抱えのプロハイランカー“松風アリサ”。

これは松風アリサのカードバトルー人生を描いた物語である。

この作品は“バトルスピリッツ二次創作”です。

不定期更新に加え、駄文になりますが、よろしくお願いします。

では申し訳程度に、「ゲートオープン！界放オオツ！」

ブローグ私塾、松風BS塾

全窓の側面から、光が射し込む教室がある。

二人も座れば、埋まってしまうような長卓が二列、四つずつならべられた教室だ。

今にもビルの谷間に飲まれ、夜闇を呼び込むだろう陽光を浴びる教室には、幾つかの人影。

四人の若い男性が屯し、ガヤガヤ騒いでいるかと思えば、その後ろの席では老夫婦が小さな声で話をしていたり、最後列にはブレザーの制服を凜と着こなす女子高生の姿が見受けられる、実に奇妙な教室だ。

やがて、陽光が墜ち、自動で電灯の白い明かりが教室を照らす頃、

「やあ、皆揃ってるか？」

全窓とは逆の位置に設置された引戸を明け、新たに銀色が射し込んだ。

“塾”教師、松風アリサ。

アリサは腰まで伸びた銀髪を振り、七人の姿を確認すると両手を“高く”伸ばして、紙袋を教卓の上に置いた。

ふう、と一息、

「全員揃ってるな。なら、始めるとしよう。さて、先週に出していた宿題だが」

言いながら流し目で四人の男性を睨みつけるアリサの眼力に、

「げっ」

口を揃える四人に呆れたアリサが、

「お前達に出したような宿題だというのに…。里村夫婦と櫻井を見る！毎週きつちりと出しているというのに、お前達は」

「まあまあ…、先生。わしら老いたモンは、時間があるがよって、宿題ができとりますが…、若者は多忙でありますが故、何卒…」

四人に怒鳴るアリサを、まるで孫をあやすように諫めようと里村夫が声を出すと、里村妻が「ですじゃ…」と頷く。

「む…、あなた方にそう言われると、辛い…」

すると、小さな頬を膨らませ、ふて腐れるように俯いたアリサを見て、

「ロリサテラエロス！」

四人組の一人、眼鏡をかけた、肥満体型の藤山が立ち上がるなり嘔血。

白化して朽ち果てると、仲間叩かれて意識を取り戻す。

「藤山よ。お前はエロゲのエロシーンに突入するまでに、パンチラで果てるような男だったのか？ 違うだろ！？ 俺達のヘブンスゲートは、まだ開かれちゃすらいねーんだぜ？」

「っ！？ ありがとう久慈！ 俺、頑張れるよ！」

「相変わらず、お前達の話はわからん」

アリサが顔をあげる。

すると、目に入っただのは、嫌悪感を隠そうともしない表情の櫻井だ。

以前、藤山の後ろに座る三屋に「黒髪ロング萌え」と呟かれて以来、髪をポニーテールに縛り上げ、最後列を陣取っている彼女に、アリサは手招きをする。

「櫻井、前に来たらどうだ？」

「結構です」

アリサの誘いを断った櫻井は、ツイとそっぽを向いてしまう。

…まー、出席してるだけマシか。成績も悪くないからな。

紙袋を横に倒して取り出した出欠表に、アリサはチェックをつけていく。

「さて、お前達のため（ひいては、読者に世界観を把握してもらうため）に、今日は世界の現状を説明してもらおうか。藤山」

「ほいさ」

待ってましたと、贅肉を揺らし藤山が立つ。

入塾の際に購入した教材のページを開き、一息。

あー、あー、と喉の調子を確認した後、口腔を広げた。

「バトルスピリッツ それはカードとコアを駆使し」

「ああ、その項は構わん。2099年から年代を追ってくれば良

い」

藤山の発するテノールボイスを押し退け、アリサのソプラノが指示する。

沈黙。

「…言い声でも、ダメっすか？」

「ああ」

即答。

残念そうに酸っぱい顔を作った藤山が、渋々年表を読み上げる。

2099年

異界の存在が発覚。

と同時に、異界の秩序とも言える“バトルスピリッツ”が地球に伝来。

「そうだな。2060年頃に騒がれていた、時間移動の正体が実は、異界へのゲートを開く、ということになっていたな。未だタイムマシンは完成してないわけだが…」

苦笑、咳払いの動作の流れを済ませると、藤山に続きを促す。

同年

娯楽としてのバトルスピリッツが普及する。
それに伴い、異界人との交流も盛んになる。

「質問ですじゃ」

「どうぞ」

拳手したのは里村夫だ。

「異界人との交流が盛んになる、と言つとりますが先生…。わしらの生活は、余り変わつとらんのじゃが…」

「異文化に触れ、取り入れることによる生活の変化が感じられない、ということか。いい質問だ。答えはこうだ。“異界独特の文化は、地球の文化のいずれかに該当する。”」

一同がどよめく。

「異界の文化には、明らかに我々人間の手が加えられていたんだ。調査隊の調べで、“異界王”というキーワードが浮かび上がった。今は故人らしいが、異界の文明を築き上げたのは、間違いなく異界

王だろうな。意図的にか偶然かは別として、異界王が地球から異界へ渡った人間だというのは、間違いないだろう。即ち、異界の文化は地球ベースに組み上げられた物といえる。異界の特産といえばバトルスピリッツくらいなものだろうな」

おおお、歓声をあげる一同に赤面が悟られぬよう、授業の準備を進めるフリをして、アリサは教卓に隠れる。

「ふ、藤山。続ける」

「おいーっす」

2103年

地球側でもバトルフィールドの構築が可能に。

これによりバトルスピリッツは、娯楽とスポーツの二面性を持つようになる。

「これは皆も知っての通りだな。特にプロハイランカーの登場により、バトルスピリッツはスポーツとしての面がより強くなっただろうな。野球チームが企業と契約しているように、プロハイランカーにも企業と契約し、それを生業とする者もいる。当然、これはバトルフィールドの登場により“やるバトスピ”だけでなく“見るバトスピ”というジャンルが生まれたからだが」

一通り語り終えたアリサが、顎で藤山に次を促す。

それよりも早く、久慈の一つ後ろに座る赤沢の、

「先生、他人事じゃないっすよね。今年度プロリーグ暫定4位、トップクラスハイランカーの一人、松風アリサなんっすから」

という言葉にアリサは、少し面食らった顔をする。

塾の講師としては適切な物言いだと判断したのだったが、なるほど、次回からは話せる範囲で“私”を絡めてゆこう。

決意したアリサが頷いていると、ふと先の言葉に引っ掛かる。

「ちょっと待て。暫定4位、と言ったのか？」

おかしい、昨晚の連絡ではまだ暫定3位に残っていたはずだ。

慌てて記憶を掘り出すアリサに、赤沢の隣の三屋が、

「一昨日の時点で4位だったアンドルー選手が、昨日の内に10勝あげたようですね。元々、先生とアンドルー選手は僅差で競いあっていたわけですし、一桁台の差で順位変動が起こっても、不思議じゃないですよ」

「今朝の更新で変わってたのか！？くそ！余裕持って弁当など作る

からこうなる！」

悶え叫ぶアリサに、ああ、と顔を上げた藤山が付け足す。

「先生、アンドルーみたいにプロ稼業に専念してるわけじゃないっすからねえ。むしろ塾講師や内職しながら、対等に渡り合えてるのが凄いくらい」

「む…、そうか」

少し得意気な笑みを見せたアリサは、気を取り直したのか、

「話が逸れたな。2103年からだったか…。藤山、続けてくれ」

「あいさ」

同年

バトルスピリッツ、プロハイランカーリーグ発足。

「先生、年いくつつすか？」

「なっ！？」

と藤山の言葉に反応したのは最後列の櫻井だ。

元来、女性の年齢やBWHを尋ねるのは失礼にあたり、それは現代でも変わらない。

櫻井の怒気を孕んだ視線に気付かず、失礼な藤山は続ける。

「今2136年じゃないっすかあ。先生もう雰囲気か“最古参”みたいな感じだから…。どう見ても小学生、鼻屑目でも中学生なのに」

最後のは小声でボソリと。

身長178cmの藤山に対し、153cmのアリサ。

アリサの童顔と柔らかそうな銀髪も相まってか、小学生がよくて中学生にしか見えない。

「28だが」

一同から、懐疑の視線が向けられるが、気にせず、

「2124年にプロリーグに入ったんだ。中学校での成績がすごい悪くてな。親にも勘当され、行く宛がなかった私を、今の“レイ・ロレンツォ”の社長がスカウトしてくれたんだ」

一息吐いて、

「『生きたいなら自分で稼げ、私がその道しるべを立ててやる』とな」

「さすが、高級ブランドの社長…。一般人に吐ける台詞じゃないっすね」

「社長には感謝している。おかげさまで、生活苦もないしな。と、また話が逸れたか。…まあ復習はこのくらいでいいだろう」

教卓の上の紙袋を下ろし、最前列の長卓に置く。

「授業だ」

里村夫婦がヨタヨタと立ち上がり、よっこらせ、と長卓を押す。

教卓から見て左最前列の長卓には椅子を設置していない。

なので、こうして二列目を押すと、合わさり、“充分な空間”が確保される。

アリサが紙袋に手をつ込み、何かを取り出すと、藤山が、

「しかし、お勉強会に来てるはずなのに、娯楽とはこれ如何に」

「面白いだろう？ “こういうこと” を教える塾があってもいいじゃないか」

一同からイエスの返答。

詰め込み型より参加型の授業が求められる時代だ。

昨今の流れにそぐわず、彼らも座学より実践、百聞は一見にしかず、アリサの行動に目を輝かせる。

それを見て、アリサの口元もニヤリと笑う。

「では始めようか。 バトルスピリッツッ！」

プロローグ〈私塾、松風BS塾〉（後書き）

〈反省会〉

アリサ「…………おい」

はい、何でござんしょ。

アリサ「バトルがないが、大丈夫か？」

大丈夫じゃない、大問題だ。

アリサ「不定期かつ【鈍足】更新だというのに、1話1バトルにしないでどうする？」

世界観とか紹介したかったんですー！バトル書いてもよかったけど、プロローグって短いもんじゃない！？

アリサ「まあ…、そうだが…。次回はちゃんとバトルするんだろ
うな？」

はい！書かせていただきます！誠心誠意書かせていただきます！

アリサ「ならいいんだが…。ちゃんと書けよ？『昨今のバトスピブームに乗ってみようと思うんだが、こいつをどう思う？』とまで言っていたんだからな」

任せんしゃい！駄文紡いじゃうよ！？　じゃあこのへんでキャラ名”紹介、言ってみよう！

アリサ「名だけか」

主人公：

松風アリサ（まつかぜ　アリサ）

塾生：

藤山虎太郎
ふじやま　こたろう

久慈重治
くじ　じゅうじ

三屋充
みや　みつる

赤沢治郎
あかさわ　じろう

里村佐吉
さとむら　さき吉

里村幸枝 さとむら さちえ

櫻井百花 さくらい ももか

プロハイランカー：
アンドルー・セルゲノフ

アリサ「本当に名前だけとはな……」

魅力的でしょ？

アリサ「……決める！合体アタック！」

ああ！？飛ばされた！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6561y/>

そうだ。バトスピで食べよう。

2011年11月20日11時28分発行